
どうせ俺は悪者ですから！

ナシオカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうせ俺は悪者ですから！

【Nコード】

N0672Z

【作者名】

ナシオカ

【あらすじ】

非の打ち所のない美少女と付き合い合っている難波夏樹は、分不相応な幸福を感じながらも日々を楽しんでいる。だが魔法の存在する異世界へと連れ去られて……。異世界トリップで主人公最強物です。

たまに不安になる。

だって、幸せすぎるから……。

そんな乙女な女子中学生のような事を内心で呟くのは俺、難波夏樹である。

現在、俺は北欧っぽい趣味のいかにもなカフェで美少女と向いあつてパンケーキを食っている。北欧・カフェ・パンケーキ。リア充爆発しろの世界である。一昔前の俺なら、近寄りもしない空間だ。

一昔っていうか、一ヶ月前でも近寄らない。一ヶ月前の俺ときたら友達と出かけても昼メシつつたら牛丼がお好み焼きだし。とかいうか女の子と出かけた事すらねえよ。それが一ヶ月前から毎日毎日毎日毎日学校帰りに女の子と一緒に。しかもすごく可愛い子だ。

「どうしたの、なっち」

「え……あ……」

ぼんやりしていた俺に、彼女 下百舌鳥高等学校で一番可愛い鈴木睦美ちゃんがムツとした表情で声をかけてきた。

「やつぱりマロンクリームのパンケーキの方が良かったんだ？ すいませんねー。ベリーのやつ頼んでなんて言っちゃって。ブルーベリーとか木苺とか、好き嫌いあるよね。でも嫌なら嫌って言うてくれればいいのに！」

「いや、別に嫌いじゃないって。ちょっとボーツとしてて」

「嘘だよ、嫌いっぽいもん！」

「嫌いじゃないって。好きだって！」

睦美ちゃんの頬がパツと赤らんだ。

「……好きとか、よくそんなの大声で言えるよね……」

「ばっ……！ 違えよ！ いやっ、違うっつか……！」

そのやり取りに、周りにいた客がチラリと俺たちを見て笑った。

バカップルはしょうがねえなみたいな、だが悪意が欠片もない笑いだ。それに物凄く恥ずかしくなると同時に、頭の隅で「やっぱこういう所にいる人間は余裕あんだな……」と冷静に思う。

前の俺がこんな痴話喧嘩めいたものに立ち会ったら憎しみと嫉妬と呪詛がブレンドされた邪悪な視線を向けることだろうに。

ともかく、慌ててブルーベリーだのなんだのとパンケーキをフォークでまとめて口に入れる。睦美ちゃんは俺の皿を見て、いかにも嬉しそうに指さした。

「じゃあ、そろそろ皿交換しよ！ はい！」

俺のところに睦美ちゃんのキャラメルバナナパンケーキが、睦美ちゃんの前には俺のベリーパンケーキが置かれる。半分で交換された皿を見て、俺の胸をまたあの乙女な不安がよぎった。

最近、俺のフワフワした「カップルとはこうあるべき」的希望みたいなものが、やたらと叶ってるんですけど……。

俺のフワフワした希望というか想像というのは、童貞丸出しの妄想だったはずだ。俺にだってリアルな男女がアニメの中みたいな痴話げんかやお弁当作ってもらったりとかパンケーキ食べあいつことが、そんな事ばかりやってると思ってる。もっとこう、面倒くさいやり取りとかあるんだろ、現実は。

でも、俺の現実　睦美ちゃんとの付き合いは、まるでそういう面倒さが無かった。

多分、睦美ちゃんの性格のおかげなんだろう。

明るくて、ちょっと気が強くて、お茶目で、さっぱりしてて、非常に好ましい性格だ。

好ましいといえば容姿もだろう。顎のあたりまで伸びたサラッサラの髪の毛は、瞳と同じように色素が薄い。肌は陶器みたいに白く、体つきはほっそりと華奢。

一ヶ月前に睦美ちゃんに告られた時は本気で夢かと思ったものだ。

高校に入学して、なんとなく入った吹奏楽部。そこにうちの高校に二年時から転校してきた睦美ちゃんも中途入部してきた。俺と同じフルートパートに入って、こんな可愛い子いるんだなーと思いつつも普通に喋る仲になって、あれ？なんか普通より仲良くね？と思つた矢先に告られたのだ。

付き合つてしばらくして「何で俺？」と聞いたことがある。

自慢じゃないが、俺は普通の男だ。

勉強もスポーツも普通にやるし、友達も普通にいるがクラスの人気者ってほどには多くない。

転入してきたその日からうちの学校でナンバーワンの可愛い子である睦美ちゃんが、普通の俺に告白するというのは変だった。普通なら俺が睦美ちゃんに夢中で夜も眠れなくて、睦美ちゃんの方は俺なんぞには鼻もひっかけない状態であつてしかるべきだった。

なのに、現実とは違つたのだ。

俺は睦美ちゃんを何となくテレビに映るアイドルのようにしか思つてなかった。すげえ可愛いけど、遠い存在だとはなから決めて、眼福眼福！くらいに思つていたのだ。そこに積極的な恋情はなかったのに、逆に睦美ちゃんは俺に好意を抱いていた。

理由を問うた俺に、睦美ちゃんは「なつちのフルート、いい音だからさー」と訳が分からない理由をあげた。思いつきり初心者俺の音がいいわけは無い。そう言つと、「うるさいな！好きな理由なんてわかんないのが普通だよ！」とキレられた。

そうかもな。そうなんだろうな。

なんか上手くいきすぎて色々不安だけど、贅沢なんだろう。というか貧乏性なんだろうな、俺。

俺はもう何も考えずに、睦美ちゃんの食べかけのパンケーキにフォークを突き刺した。

「おまえ、すげえよな」

翌日の放課後、友人の佐渡にそう唐突に声をかけられた。

「……なに、藪から棒に」

「先週の小テストに出たな、その言葉。ってそうじゃなくて。お前
つてさー、なんか普通だよな」

「今すげえって言ったそばから普通って」

「だからー、普通だからすげーよ。あの鈴木睦美と付き合ってるの
に普通だもんな」

「そりゃまあ、睦美ちゃんってすげえ可愛いけど。でも喋ってたら
面白いぞ」

「いやあ、それはお前だけだって。鈴木睦美って」

話していた佐渡が唐突に口を噤む。視線を辿ると、教室の入り口に
睦美ちゃんが立っていた。

「あれ？ どうしたんだろう」

「お前、早く行ってこいよ」

佐渡は静かに目を逸らして、そう言った。

それだけで俺には分かった。佐渡は睦美ちゃんを嫌っている。
考えたら、佐渡はいつも睦美ちゃんを「鈴木睦美」とフルネームで
呼ぶ。その硬質な声音に一切の好意は含まれていなかった。

「あー……うん。じゃ、また明日」

だが俺は何も言わずにその場を離れた。おまえ俺の彼女嫌いなのか？
何で何で？なんて言うほど俺は空気読めなくはないのだ。

それに睦美ちゃんって案外嫌われてるんだよな。

女子にも男子にも結構睦美ちゃんを嫌ってそうな奴らがいる。まあ、
人気者の宿命ってやつだろう。俺のような人間には味わえない苦勞
だ。

佐渡は軽く手をあげて、「また明日」とボソリと呟いた。

睦美ちゃんの用事は、今日部活が無くなったというものだった。す
るりと腕を組まれ、二人でぶらぶらといつもの帰り道を歩く。

「……今年は藤咲くの、早いね」

途中の公園にある藤棚を見ながら、睦美ちゃんがぼつりと呟いた。

「そうだったけ？ 花なんか見ねーからな、俺」

「普通はゴールデンウィークくらいだよ。一緒に見に行こうって誘
おうと思ってたんだ。カステラ持ってたさ」

「おお、睦美ちゃんのカステラ！」

なぜかカステラというニツチなお菓子作りにはまっている睦美ちゃ
んは、しばしば学校にもお手製のカステラを持ってくる。それがま
た旨いのだ。

「あれ旨いよな、マジで。カステラ屋になれるって」

「えへへ。じゃあカステラ屋になっちゃおうかな、将来」

「いいねー。俺雇ってよ」

睦美ちゃんが俺の腕をぱしんと叩いた。

「もう！……でもいいなあ、そういうの。なっちと一緒にお店するのなあ」

夢見るような口調が可愛い。ので、

「いいよ。俺次男だし、睦美ちゃんちに婿入りでもするわ」

冗談を言つと、睦美ちゃんは弾けるように笑った。

「なっち、カステラ食べ放題だね！」

その笑顔に胸が突かれた。

うん、いいな。やっぱり睦美ちゃんっていいよな。

「ずっと一緒にいたいな……。大人になったら、わたし、なっちと結婚したいよ……」

睦美ちゃんの頭が俺の腕に擦りつけられる。

俺は知らずに口元を緩めていた。

好きな子とカステラ作って、売って、暮らして。そういう人生もいいかもしれないな、と思いながら。

そう、睦美ちゃんは俺の好きな子だ。告られて可愛いくていい子だから付き合つて、だけど俺は睦美ちゃんの事を本当に好きなのかどうかよく分からない気がしていた。だけど、こういう気持ちになるってことは、俺はこの子が好きなんだろう。

「そうだ、ゴールデンウィークは私んちの田舎行こう！私のふるさとー！」

「……は？」

ぐいっと迫るように言われて、俺は夢から覚めたように瞬きをした。

「え？ 睦美ちゃんのふるさと？ て何？ おばあちゃんちか何か？」

「一緒に行こうよ。楽しいよ。川遊びとか出来るし、自転車二人乗りして河原行こうよ。お弁当作るしー」

わお、自転車二人乗りなんてアニメの世界だね。そのうえ弁当だと。ファンタジック。

そう思うのに、俺は答えを躊躇っていた。

さっきまでの浮き立った気持ち、途端にどこかへと消えてしまっていた。

風の香りがやけに甘い。すぐ後ろに咲く藤の花の香りだ。人の頭を多幸感でいっぱいにする、甘ったるい薄紫色に色づいたような香り。こんなに藤って匂いきつかったか？

さらさらの絹糸みたいな髪に囲まれた睦美ちゃんの小さな顔。完璧な微笑が口元に刻まれている。俺の右手を柔らかくて小さい手が握ってくれている。

なのに、どこから忍び寄るような違和感があった。まるで真冬の暖かな部屋にいるのに、カーテンの下からそっと忍びこむ冷気のよう。

とにかく、何となく行きたくない。

面倒だからやめとく。そう言おうとした時に、睦美ちゃんの興味がふと通りがかりの店に逸れた。

「あ、ドラッグストア！ 寄っていい？ ハンドクリーム買いたい」

どこかホッとして、俺は頷いた。睦美ちゃんは迷わずにひとつのハ

ンドクリームを手にとって会計した。

「春なのにハンドクリーム塗ってんの？ 女の子だな」

「取らぬ狸の皮算用ってやつだねー。……実は故郷に連れていきたいなとかずっと思ってたの。で、なつちをおもてなしするためのお弁当の練習してたんだ。そしたら洗い物で手が荒れちゃって」

自嘲ぎみに笑う。

俺は居たたまれなくなつて、「貸して」とハンドクリームを奪い、睦美ちゃんの手に塗った。

指先にも丁寧に塗りこんで、そのまま手を握りこむ。指を絡めると睦美ちゃんは「ありがと」と、そつと微笑んだ。その微笑に前に感じた好きだつて気持ち膨らんでゆく。

ああ、もう。何となく行きたくなかったけど、これじゃ仕方ないじゃないか。

俺はため息をひとつついて、睦美ちゃんの頭をくしゃりと撫でた。

「……分かった、一緒に行く」

「えー！ 本当！？ 嬉しいよ！ あ、そうだそうだ！ 一筆書いて！ 一緒に行きますって」

何だそれ。俺は苦笑した。

「一筆って。何それ、睦美ちゃんって不思議ちゃん？ そういうの最近ウケないからね」

「誰が不思議ちゃんだ。違うつてー。だって絶対来て欲しいんだもん。なつち、あんまり行きたくなさそうだったし、行かつて言った証拠が欲しいの！」

バレてたのか。しかしさっきまでシヨボンとしてたのに、今は凄まじくいきいきとしている。さてはさっきのは演技だな。末恐ろしい子だ。

「あーごめんな。俺、出不精なんだよ」

「分かるよ。でもねー、面倒なのは行くまでで、行ったらすごく楽しいから」

「そんなもんだよな、分かってるんだけど」

「これに書いて！ 雑貨屋さんで買ったんだ。可愛いでしょー」

言いながら、俺は睦美ちゃんが出してきたざらついた紙を受け取った。女の子が好きそうな、占いっぽい不思議な雰囲気紙だった。薄茶色の高級っぽい紙に、細かな模様が隅から隅までびっしりと印刷されている。その模様が小さく途切れている箇所があって、睦美ちゃんはその部分を指さした。

「ここ！ ここに名前書いて！」

「あ？ 一緒に田舎に行きますって書かなくていいの？」

「それはわたしが後から書くよ。なっちって手で文字書くの嫌いじゃん」

「確かに。俺、字が汚いからさー、嫌なんだよな。小さい頃は習字やったし、これでも初段取ったんだけどな」

「はいはい、その汚い字と一緒にいきますって気持ちこめて書いてよ」

「うるせー。……睦美ちゃんとちゃんと一緒に行きまーす、と」

言いながら、俺はカバンを下敷きにして、渡されたペンで名前を書いた。

「はい、書いたよ」

顔を上げて、俺は睦美ちゃんに紙を渡そうとした。

「……睦美ちゃん……？」

俺はポカンとして睦美ちゃんを見つめた。睦美ちゃんはじっと俺の手元の紙を凝視して、受け取ろうとしない。その顔は異様なほどの真剣さに彩られていた。

そして、俺はさっきの違和感に気づいた。

睦美ちゃんは俺を故郷に誘う時、真剣だった。それが違和感の正体だ。

彼氏を自分の故郷に招くにしては、どこか緊張して真剣で焦っていた。

まるで、今までの成果が試される受験生のような雰囲気で

ザアツ、と強い風が吹いた。

木々を渡る葉擦れの音だ。強い風が葉を揺らして　いや、違う。

これは声だ。ざわめく沢山の人の声。

沢山の人が何かを一心不乱に喋っている。聖歌のように節がついたなにかを皆が……。

そうだ、睦美ちゃんは？　紙を……あの紙、

俺はあの紙が風に吹かれる砂のように端から溶けているのを見て、慌てて両手を被せて守ろうとした。だが紙はどんどん溶けてゆく。灰のような水のような感触が俺の手に広がる。

「睦美ちゃん、ごめん、紙が」

ああ、それにしても体が重い。もう立ってられない。

「……むっ、」

ガツン、と体に衝撃を感じて、俺は咄嗟に両手をついた。なんだこれ？ あれ？

「おめでとうございます、ムーアリース閣下」

知らない人の声にそちらを向くと、銀髪の女性が跪いていた。二十代くらいの、やけに肉感的な女だ。跪いているので胸が膝に押されてやけにセクシーなことになっている。だが服装はその体を隠すように首元から手首まであるかつちりとした軍服のようなものを着ている。

は？ 誰？

そう口に出したつもりが、声が出ない。舌が重くて……舌だけじゃない。体中が重くて何も出来ない。俺はペタリと冷たい床に座っていた。

「出迎えご苦労。……疲れた」

睦美ちゃんの声に、首だけを動かしてそちらを向く。

さっきまで制服を着ていた睦美ちゃんは今、一枚の豪勢な布だけを銀髪の女性に着せかけてもらって羽織っている。赤いビロードのよ

うな生地に、金の糸で妙な紋章の刺繍がしてある　マントのようなものだ。そのマントから裸の肩と足が出ていて、下に何も着ていないと分かる。

「さあ、ルヴァ殿もどうぞ」

銀髪に話しかけられて、肩に何かをかけられる。いや、ルヴァって誰だよ。

肩にかけられたのは、睦美ちゃんが着ているものとは違う、黒一色の薄い布だった。

俺はこの状況に呆然として銀髪の女性を見上げた。彼女の水色の瞳も俺を見つめていて、目が合うと動揺したように逸らされる。

「うっ、ムーアリース閣下あゝ」

彼女に、困って甘えるように名を呼ばれて、睦美ちゃんが俺の方を見た。じつと俺を凝視して、ぼつりと呟いた。

「……美形だな」

銀髪がぎょつとしたように睦美ちゃんに詰め寄る。

「えっ、何ですかその反応！　向こうじゃ容姿が違ったんですか？」

「あちらの平均的な容姿をしていた」

「すごい……！　長期間に渡って変化していたなんて……」

銀髪が潤んだ目で俺を見つめる。そのねっとりした視線も全く気にせず、俺は睦美ちゃんをじつと見ていた。

そして、不思議と凧いだ気持ちで考えていた。そんな状況じゃないというのに、俺は納得がいつていた。

やっぱりなあ。

今、睦美ちゃんはモノを見るような目で俺を見ている。その目には恋情などという甘やかなものは一切感じられない。それだけじゃない。口調は淡々とし、全く今までの『睦美ちゃん』とは違う。

「尋問は後。覚醒しないうちに白銀の塔へ」

「はっ。……でも閣下、良かったですね。これで閣下の姉君が」

喋りながら、銀髪が俺の口に布を押し付ける。強烈な甘ったるい香りがする、と思った瞬間、抗いがたい圧倒的な眠気に襲われた。床上半身が倒れそうになって、細い腕に抱きとめられる。

必死に瞼を薄く開けると、睦美ちゃんが俺を見つめていた。

その無表情な瞳の中に、少しの憐憫の色があった。俺はこの異常な状況で、本当に納得していた。

騙されたわけだ、俺は。

なんだかよく分からないが、それだけは確かだ。俺は睦美ちゃんにホイホイと騙されて、何となく嫌な予感がしていた「睦美ちゃんのふるさと」に連れてこられたわけだ。

また布を押し当てられ、眠気が一段と強くなった。

やっぱりなあ、おかしいと思った。俺を好きになるって不自然だったもんな。くそ、なあにが『大人になったら結婚したいよ』だ！ 詐欺じゃねーか！

揺さぶられて目が覚めた。

「おはよう、ルヴァ殿」

「……………」

だから、ルヴァって誰だ。

しかし寝起きに聞くには、無駄に色っぽい声だ。俺はのそりと起き上がって、ベッドの脇に座っている銀髪の女を見据えた。窓から差し込む淡い光　夕刻の赤い陽が、銀の髪に柔らかく映っている。

「お返事は？」

水色の瞳がゆるく眇められる。なんというか、仕草のひとつひとつが無駄に色気に満ちた人だ。したたるような色気ってのは、こういうのを言うんだろう。

俺はげんなりした気分で溜息をついた。寝起きにはもっと爽やかなものが見たいものだ。爽やかな　ふと睦美ちゃんの事を連想した所で更に嫌な気分になった。

銀髪女の後ろには、ワイン色の長髪を後ろで一括りにした三十絡みの男が立っていた。銀髪女と同じ軍服を着ている。えらくガタイがいい上に、こめかみ辺りに傷跡があり、髪と同色のワイン色の目が三白眼である。その目が俺をじーっと見ている。こわい。

ふと気づいて、見下ろす。俺、さっき裸だったような……ああ、良かった。今は素っ裸じゃなかった。服は着せてもらえたんだな。良かった。

その視線に気づいたのか、銀髪女が言った。

「ああ、お洋服はこの後ろの男の人が着せてあげたの。びっくりしちゃった。裸で来るのね、異世界転移って」

「……」

「私、普段は男性の裸を見た程度では騒がないのよ？ でも、ルヴァ殿ってかなり私のタイプなんだもの」

「……」

「困ったわ、ご機嫌が悪いみたい」

「……薬かがされて眠らされて、機嫌がいい訳ないと思いますが」

掠れた声で文句を言うと、銀髪女がアラ、という顔をした。

「最初に言うセリフがそちらなの。転移魔法の件は怒ってないの？ 取り乱さないの？ ここはどこだーって、どうして言葉を理解できるんだ、お前は誰だ、俺をどうする気だ、もとの世界に帰せって」

銀髪女の唇の端がきれいに持ち上がる。だが、俺はその言葉に動揺はしなかった。

これはいわゆる異世界トリップってやつだろ？ 俺の理解の範疇外のことが起こってるんだ。そりや何かの魔法で言葉だつて分かるんだろ？ それに俺は清潔なベッドに寝かされていた。恐らくは殺されたりはしないだろう。あと、元の世界　これはやばいな。帰らないと、親が心配……あれ？ 俺、親っていたっけ？

俺はちよつと焦った。親の顔が思い出せない。俺って兄弟もいたような気がするんだが、それも思い出せない。魔法使われた後遺症か何かで記憶が混乱してるのだろうか。

……まあいい。しかし、異世界トリップってあれだよな、世界を救う勇者だとか、存在するだけで雨が降ったり花咲き乱れたりする神の子とか、なんかそういうのがトリップするんだよな。やばい。後者はいいが、前者は無理だわ。俺体育の授業ですら柔道とか痛くて無理だったし。

内心ハラハラしていると、銀髪女が後ろに立つワイン色の男を流し見た。

「どつ?」

そう一言聞いた銀髪女に、男は首を振った。その瞬間、ふと空気が軽くなる。こちらに連れてこられた時に感じたあの水のような灰のような感触が俺の頬を撫でるように去っていく。

もしかして、これ魔法の粒子みたいなやつなのか? 今、魔法かけられてた?

「やっぱり陰の魔法だな。強力な封印魔法、もしくは条件付き封印魔法。容姿が変わったそうだから、少しは綻びているんだろ?」
「...。魔力は一切感じないし、記憶もこちらのものは全くない。恐らくは、条件付きの封印魔法の可能性が高いんじゃないか? 何らかの条件を満たさないと解けないだろうな」

低く渋い声だ。その言葉に、銀髪女は小首をかしげた。

「条件って?」

「かけた奴しか分からねえよ。まあルヴァ本人がかけたんだろ?」
「ど?」

「まったく。陰の魔法って面倒なものばかりなんだから……」

銀髪女が溜息をついて、ほっそりとした指を頬にあてた。

「とにかく、閣下に報告しなくちゃ。きつと、がっかりなさるわ。それでも報告はしないと」

目を伏せ、悲しそうに呟く。その表情だけが、今まで見た銀髪女の表情の中で生々しい。作ったような色気のある声ではなく、心底がっかりした声だった。

出ていかれそうになって、俺は慌てて口を開いた。

「ちょっと待って。俺、ルヴァなんて知りませんよ。その人と間違っ
つてつれてこられたってことでいいですか？」

何言ってるのこの人、みたいな目で銀髪女が俺を振り返った。が、
すぐに合点が行く顔になる。

「そうね、説明した方が記憶も戻りやすいかもね。どう思う？」

聞かれたワイン男は、肩を竦めた。どうでもいいって感じで。

銀髪女はまた椅子に座りなおした。

「私はマリア。マリア・トレ。マリアって呼んでね。こちらの彼は
バードンギアル・デ・ルラミス。一応貴族だから嫌味っぽくルラミ
ス様って呼んであげてもいいけど、バードでいいわよ。で、あなた
はルヴァ・ルヴァン・ルヴァ。ふざけた名前よね。何か思い出した
？」

思い出せるわけねーだろ。

俺が面喰らっていると、銀髪女　マリアはさらに続けた。

「二つ名も色々あるのよ。笛吹きのルヴァ、金ぴかのルヴァ、陰の
大魔導師、金と色の探求者、イフリータケルンの悪魔、悪の枢軸、
悪徳の伯爵、地獄の使者　」

「ちょ、待って！　何ですか、その恐ろしげな二つ名！」

マリアがわざとらしく自分の体を抱きしめる。

「恐ろしいわよね、身の毛もよだつわ。でも、ゼーんぶ貴方の二つ名よ。ルヴァ殿、あなたは百年以上前から数力国に賞金をかけられた第一級危険指定犯罪者なの。信じられないわよね、こんな若いのにもう百何十歳なんて」

「……………」
「ちなみに、ムーアリース閣下……………あ、鈴木睦美様と名乗ってらしたわね。その睦美様が素晴らしい手腕でもって、異世界へ逃げていたあなたを捕まえたってわけ」

「……………」
「本当ならこちらに来た時点で封印が全て解けて記憶と魔力が覚醒すると思ってたんだけど……………困るのよね。第一級危険指定犯罪者になると、審議会が開かれるの。うるさいのがいるから、きつと『記憶が無いのであれば、その者は罪を犯した者とは別人の善き者である。聖者トーリア様の書によると、記憶と罪は結びつかなければならず、その者の権利は守らなければならないのです』なんて言い出すわね、きつと……………ふふふ、あのカスが！ クソが！ いつもいつも私のムーアリース閣下に立て付きやがって！」

「……………」
「あのクソアマがいなけりや閣下は！ 麗しき閣下は！ 十二億トレドの賞金を手に入れられるのにいいいい！ 閣下の悲願の二十億トレドが貯まるのにいいいい！ なにが『トーリア教の天使』よ！ あんなクソ神官、いやクソなんて甘いわ！ 腐った魚の内蔵、いやこれは長い！ あああ、罵倒に罵倒を重ねても罵倒し足りない！」

「……………」
「もしかしてあんなにムーアリース閣下に絡むのは、なにかゲスな思惑があるんじゃないかしら……………！ そうよ、不自然よあの絡み方！ 清らかで純粹で美しい閣下のことを邪な目で見てるんじゃない

かしら！？ 女的身でありながらゲスな女！」

いや、ゲスはお前だ。

ともかく、マリアは激昂している。目尻に涙まで滲んで、天井に吠えている。バードは関心がなさそうに小さなナイフの背で爪の間をいじくっていて、ポロポロと垢らしきものが床に落ちている。カオスだ。だが、そんなことはどうでもいい。

俺は全てにそつと目を逸らして窓から入る西日を眺めた。ああ、異世界でも夕陽って黄昏るわ……。

俺って、勇者でも神の子でもないんだ……。ていうか、睦美ちゃん……金目当てか……。

犯罪者。指名手配犯。投降しろーお母さんが泣いてるぞー……っってお母さんって誰だっけ。いやもうそんな事思いつけないし、どうでもいいか。

とにかく俺は、異世界で犯罪者スタートらしい、です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0672z/>

どうせ俺は悪者ですから！

2011年12月5日11時47分発行